

# いい加減な夜食 3

秋川滝美 Takimi Akikawa



アルファポリス文庫

## 目次

【書き下ろし番外編】 いい加減な理由	349
いい加減じゃない保育所	245
いい加減な登場	159
いい加減な和解	5

いい加減な和解

## 第一章 華燭の典

「姫さん、こんな奴やめて、俺にしとけ！ そしたら白無垢でも色打ち掛けでもなんでもありだ！」

「ぶっ殺すぞ、大澤!!」

「やれるもんならやってみやがれ！ あんたにひねられるほど落ちぶれちゃいねえよ！」

「なんだと、この野郎!!」

「俊紀さん、落ち着いて！ 大澤さんも俊紀さんからかうのやめてくださいーい!!」

いい加減にしないと二人まとめて放り出しますよ！ と佳乃に仁王立ちで言われ、今にも掴み合いを始めんばかりだった男二人は、つまらなそうにそれぞれが座っていた椅子に戻った。まさか自分たちよりも遥かに小柄な佳乃に、放り投げられはしないだろうと思う反面、柔道の黒帯である彼女ならもしかしたら……という気もしたのかもしれない。

原島財閥総裁原島俊紀と婚姻届提出済みの妻、佳乃は現在、原島邸の居間で結婚式の打ち合わせの真っ最中だった。俊紀の父、原島孝史をはじめ、使用人頭の宮野基、スタイリストの門前望、緊急対策班班長の大澤伸行も同席している。

学生時代、ハウスクリーニングのアルバイトをしていた佳乃が、俊紀専属の夜食係として無理矢理引き抜かれてから早数年。すったもんだの挙げ句、佳乃は、俊紀が企んだ婚姻届の複写詐欺によって彼と入籍まですることになってしまった。その後、順番違ひとはいえお互いの想いを確認したものの、今度は俊紀が交通事故で意識不明の重体になるという不測の事態。どうにかそれも乗り越え、二人はやつのことで結婚式に漕ぎ着けた———と思った佳乃の妊娠が発覚し、式も当初の計画どおりとはいかなくなってしまう。

その最たるものは婚礼衣装だ。なんと俊紀は予定していた白無垢の打ち掛けを却下すると言う。

子どもの頃からずっと、白無垢に綿帽子の結婚式を夢見ていた佳乃にしてみれば、そこをなんとか……ということ、目下絶賛交渉中である。

そこにありえない割って入り方をした大澤。彼は、佳乃に加勢するというよりは、単に俊紀に嫌がらせをして面白がっているだけで、味方になってなりはしない。いいから

黙っててください、と罰点マスクをつけさせたいほどだった。

まったくもう……と思いつながら、佳乃は交渉を再開する。

「そんな心配するぐらいなら、いつそ結婚式自体をやめにすればいいじゃないですか！」

「そうはいかないから、あれこれ配慮してる」

「だからその『配慮』が思いっきり方向違いだと言ってるんです！」

「長丁場（なちぢょうば）になるし、体に負担がかかるから和装はやめろ、というののどが方向違いだ。打ち掛けなんて今のお前には最悪だろう」

「打ち掛けじゃなくて長丁場をやめてください！」

「これでも当初の予定より一時間も短くしたんだぞ」

「どれだけ長い結婚式をするつもりだったんですか！」

「ただでさえ、緊張やら過密スケジュールやらで具合が悪くなる新婦は多いと聞いた。

その上、重苦しい和装なんかにして何かあったらどうする」

「だから、そうなる前に終われるように時間を短くしてくださいって言ってるんじゃないですか」

「時間はぎりぎりまで削った。もうこれ以上は無理だ！」

「来賓（らいひん）の挨拶が多すぎるんです！ いったい何人に挨拶させれば気が済みますか」

「私を誰だと思ってるんだ、原島財閥総裁だぞ！ 原島家の結婚式で挨拶することは一種のステータスだ。あつちに挨拶させて、こつちにさせない、なんてことになったら政治紛争にまで発展しかねない」

佳乃はつい我を忘れて、何様だ!! と叫びたくなる。

答えなんてわかっている。言うまでもなく『俺様』だ。

自分の結婚式における挨拶の有無で政治紛争が起ると考えるあたり尋常じゃない。それなのに、孝史や宮野、門前、大澤までも、顔色一つ変えていない。みんなして俊紀の言う政治紛争が、本当に起こりかねないと思っっているらしい。

なんといつても日本経済界の覇者（はしや）とまで言われる原島財閥総裁の結婚式である。世界中から集まった来賓の前で挨拶をするということは、政治家だけではなく各界の要人にとっても恰好のデモンストレーションチャンス。一分でも三十秒でもいいから……と誰もが考える。そして、その機会を均等に与えなければ、確かに争いが起こるかもしれない。かといって、最初から最後まで来賓挨拶ばかりの結婚式なんて考えただけでももうんざりだ。だが、それを防ぐために間隔をあげて配分しようとすれば、どうしてもそれなり

の時間が必要となる。

俊紀が努力しなかったとは言わない。彼だって挨拶を聞き続けるなんて退屈に決まっているのだから、可能な限り削ったはずだ。長くても一分、もしも超過したら即刻出入り禁止と宣言するぐらいの勢いだっただも聞いた。

そこまでしても披露宴にかかる時間は二時間半。俊紀の言うとおりに、当初予定していた四時間近い式よりは確かに短くなっているのだが……

「下手に式なんてやるからです。全部やめましょうって何度も！」

「そうはいくか！」

無駄な抵抗なのは、百も承知だった。本当は、結婚式をやらないわけにはいかないことぐらい、佳乃にだってわかっている。だからこそ、せめて衣装ぐらいいは自分の好きなものを選びたい、それが佳乃の望みだった。白無垢は子どもの頃からの夢だったのだ、それを叶えるぐらい、いいではないか、と……。だが俊紀はそれすらも否定した。「何でそこまで拘わるんだ。親睦会の衣装なんていつだって『何でもいいし、どうでもいい』だったくせに！」

ソファに腰掛けた佳乃をわざわざ立ち上がって見下ろし、まるで説教みたいな口調で

言う俊紀。

いつものように脇に控えて二人のやり取りを聞いていた宮野は、あからさまに口をとがらせている佳乃を見て、苦笑しながら言葉を挟んだ。

「俊紀様、結婚式と親睦会を同列に考えるのはいかがなものでしょう？　いくら佳乃様が普段から衣装を気にされない方だといっても、ご自分の結婚式となれば別でしょう」

いや……別に衣装を気にしていないわけじゃないんですけど……

佳乃にしてみれば、門前を含めて、原島家が要求してくる服装と佳乃の好みがあったく合わず、もはや摺り合わせることすらできない、というのが正直なところだ。

最初の親睦会のおかげで、装うことも給料のうち、と諦めて、門前に任せっぱなし。差し出された衣装をただ機械的に着たり脱いだりしてきた。

普段の、シンプルなシャツとジーンズというスタイルは、『機能性と肌触り』という項目を最大限重視した結果なのだ。それを衣装を気にしてと言われてしまうのはいささか心外である。

ただ、佳乃の援護射撃をしてくれようとしている宮野に、ここで突っ込む必要は皆無。

少しでも白無垢しろむくに近付くならなんとも言ってくれ、であった。

元々、上品な鶴の織模様が施された白無垢だけは自分で選んでいた。そのあとのお色直し用の衣装は、色打ち掛けからウエディングドレス、カクテルドレスに至るまでそれぞれ「どうでもいいです」といつもどおりの丸投げっぷりで、あまりの温度差に門前に呆れられてしまったほどだ。

温度差の原因は、佳乃が中学生の頃に見ていたテレビドラマにあった。

「うわ……すごいイメチェン」

男勝りで腕かみっ節せつも口も達者という設定の主人公が、お約束の紆余曲折よきよくせきの末、相手役と結ばれることになった。

短い、しかも全体を立てたバンク風の髪に、直線美を誇る体のライン。口を開けば数分後には相手の男と口論発生、というぐらい元気のいい主人公だったのに、結婚式シーンで白無垢を着た姿は見違えるほど女性らしかった。

「結婚式の和装っていいわよ。つんつん髪でも基本はカツラだから平気だし、凹凸くぼとこなんてないほうが似合うし。あんたも結婚するときは和装にすれば？」

テレビの画面に見惚まぼれている佳乃を笑いながら、母はそんなことを言った。

そのころ既に柔道を始めていた佳乃は、邪魔にならないようにと髪はベリーショート、体形はドラマの主人公に負けず劣らずのスレンダー。同級生の女の子たちが日に日に凹凸に富む体形に変わっていく中、年頃になれば少しはなんとかなるはず、という母子ともどもの期待を明らかに裏切りそうな成長具合だった。

運動量は増大する一方だし、あれだけ食べているのにちっとも身に付かないという現状から考えても、この体形はおそらくこの先も劇的変化は見込めない……。それを見越しての母の発言に、佳乃は反論できなかった。

母から書道や和服の着付けの手ほどきを受けていた佳乃にとって、洋装のウエディングドレスよりも白無垢しろむくのほうが遥はるかかに馴染なじみやすかったことも、和装での結婚式を選ぶ要因の一つだった。

「お母さん、知ってた？ 婚礼衣装が白なのって、太陽の色だからなんだって。高貴な色だから武家にお嫁に行くときには白無垢って決まっていたらしいよ」

「へえ……太陽の色……それはかっこいい。あんたはそういうの好きそうよね」

「うん。かっこいいはかわいいよりずっと好き。私も結婚式は白無垢にしようって」

そう言う佳乃に、母はちょっと顔をしかめて言った。

「ねえ、結婚式って結婚するために挙げるってわかってる？」

「そういうえば……」

クラスメイトの女子たちは、アイドルから同級生まで男子の品定めに忙しかったが、佳乃は男子というのはすべからく投げ飛ばすものという認識しかなかった。従って、その男子の誰かと結婚式を挙げるなんて想像したこともない。

母は、普段の佳乃をよく知っている。だからこそ、佳乃が心を動かされたのは衣装としての白無垢であって結婚式のものではないのではないかと心配したのだろう。

「でもって、婚礼衣装を着るためには結婚式をやらなきゃいけないのよ？」

「ですよー。あんなの無駄以外の何物でもないのに！」

母は、佳乃の答えを聞いてがっかりしたように言った。

「……女の子の結婚とか結婚式への憧れって、もしかしたら胸とかお尻に詰まってるのかしら？」

凹凸くぼちに乏しい佳乃は、その部分に詰まっている憧れも少ないのかも……とまで呟く。

佳乃は、その場では思いっきり膨はれて見せたものの、案外当たっているかもと感じたことを覚えている。その自分が結婚する、しかも武家どころか、財閥総裁という殿様クラスの男となって想定外もいいところだった。

結局、結婚式や結婚そのものへの願望は置き去りにされたまま、白無垢願望だけが順調に育ち、今では佳乃の中にしつかり根付いてしまっている。

だから結婚式を、しかも自分の意に反してこんな大がかりに挙げることになるなら、せめて白無垢という希望ぐらいいは……と思うのも無理はないだろう。

佳乃は、洋装にしろと言う俊紀に精一杯の抵抗を示した。

「そもそも、昔の人は出産までずっと和服で帯を締めてたんですから、二時間半ぐらいなんとかなると思います！」

「昔の人は慣れてたんだ！ なんならお前今日からずっと、一日中和服で帯を締めててみるか？」

「うう……それはちょっと……」

機能性と肌触りという最大重視項目に大いに差し障る、と佳乃は唸る。俊紀は、ほら見る、と言わんばかりの顔になった。

「だろう？ だったら白無垢は諦める」

「でも、和装じゃないなら神前も仏前もアウトですよ？」

「当然、教会式だな」

何故か、にやりとする俊紀。佳乃のほうは、それもねえ……と思いつながら頭の中で想



像する。

あの教会の重厚な両開きの扉から祭壇まで、ずらりと並ぶ参列客の注目を浴びて延々と歩いていく……。それって、いったいどんな罰ゲームだ！

それを女の晴れ舞台だと言うのであれば、そんな舞台、好きに代役を立てていただいでけっこう、いっそ主役体調不良により公演中止、こそが望ましかった。

神前、仏前の式ならば、新郎新婦は一緒に入場する。いくら結婚式の主役は花嫁だといつても、二人の人間がいれば参列客の視線だつて自然と分散するはずだ。

というよりも、大多数の人間は、白無垢、綿帽子わたぼうしなどという本来の姿が想像しづらい仮装状態の花嫁よりも、素顔でもひたすらど派手な花婿殿に注目するのではないだろうか。

やっぱり、ここは和装で神前あるいは仏前でないと……と新たな論戦を挑もうとする佳乃に、宮野はいつもの感情抑圧型笑顔で、諭すように言う。

「私としても、佳乃様の白無垢姿は是非とも拝見したいところです。ですが……和装となると、飲んだり食べたりもかなり制限されますが……佳乃様、支障があまりでは？」

ただでさえ振り袖の扱いは難しい。しかもあの上等の白無垢を汚さないように飲んだり食べたりするのは至難の業むづかしいわざではないか。そもそも文金高島田——佳乃の場合はカツラ

になるが——で下を向いて食べるというのは……と宮野はさも心配そうに言った。

うわあ……寝返ったよ、宮野さん!!

佳乃は思わず、宮野を裏切り者認定しそうになる。その直後、いや待て、宮野さんは元々原鳥家の使用人頭だ。俊紀さん対私となったとき、宮野さんが俊紀さんにつくのは当然だった……と気づいて、頭を垂れた。

俊紀は宮野の言葉を聞いて、我が意を得たり、という顔をしている。

「だよなあ。結婚式はともかく、披露宴でろくに飲み食いできないというのは、お前にしてみれば地獄じゃないのか？ 特に最近おとついは食欲も旺盛わんげいのようだし」

俊紀の言うとおり、帰国してからの佳乃の食欲は、日に日に増大傾向。それはもちろんおなかにいる子どものせいでもあるのだが、ドイツにいる間ほとんど食べられなかった反動のようにおなかが空いて仕方がない。

その状態で、和装の支度から始めて披露宴が終わるまで、ろくすっぽ飲食できないのは悲惨すぎる。そもそも白無垢ということはお化粧だつて白塗りに真っ赤な口紅。あれを崩さないように食べるなんて……と考えただけで滅入りそうになる。

宮野の発言だけでもかなりの効力があつたというのに、今度は門前まで加勢し始めた。「佳乃さん、この白無垢、ものすごく生地も仕立てもいいけれど、その分重いの。カツラだっていくら昔に比べて軽くなつたといつても、普段は頭に載せていけないものだから負担には違いないわ。ベールのほうがずつと軽いわよ。ドレスだってあなたの好みを考えた特注品だし、そりゃあ素敵な仕上がりよ」

ちよつと待て！　なんで、特注品のドレスがすでに仕上がってるんだ!?　と佳乃は訊き返したくなる。今、まさに結婚式の打ち合わせをしている最中なのに……。元々お色直し用として予定していたタイトなマーメイドラインのドレスは、妊娠の発覚により大幅な仕様変更が必要になつたはずだ。ドレスがもうできあがっているのはおかしい。さでは俺様総裁、勝手に注文したのか……？

けれど、その疑問を口にする前にとどめの台詞が降ってきた。

「それにね、あなたが無理するつてことは、おなかの赤ちゃんにも無理をさせるつてことなのよ?」

負けじと反論しようとしていた佳乃のテンションが一気に下がった。

そうだった……今は何よりもこの子のことを考えないと……

いくら白無垢が長年の憧れだったとはいえ、たかが衣装のためにおなかの子どもに負

担をかけてはいけない。もう自分は母親になるのだから……

ドレスは一流デザイナーの特注品だと門前は言うし、コーデイネイトのプロである彼女がこれだけすすめるのだから、直線美を誇る佳乃が着ても見栄えがするものなのだろう。ならば答えはもう決まっていた。

そんなわけで、佳乃はウエディングドレスを着て教会で式を挙げることになつたのである。

十

式の段取りが決まり、佳乃は門前と衣装についての細かい打ち合わせをするために出ていった。

宮野は夕食前に一休みしたいという孝史を別室に案内しに行き、居間には俊紀と大澤だけが残っている。佳乃に叱られて以降、おとなしく話を聞いていた大澤は、つくづく呆れたという口調で俊紀に言った。

「あんた、本当にこそ野郎だな!」

もちろん俊紀は、聞き捨てならないという顔になる。

「何がだ。佳乃の体調を考えれば妥当だろうに。本人だって納得した」  
 「納得した？ よく言うぜ。どうせ、宮野のじーさんとスタイリストを懐柔して、納得するしかないようにもってつたんだらう？」

「懐柔？ 人聞きの悪いことを言うな」

そんな言葉を返しながらも、俊紀はわずかに決まりの悪そうな顔になる。それを見逃す大澤ではなかった。やはり、俊紀は事前に佳乃を説得するための根回しをしていたに違いない。

さらに大澤は、容赦ない追及を続ける。

「神前式でずっと前向いて並んでつっ立ってなきやならねえから、ちっとも姫さんを見られない。でも、教会式なら、少なくとも姫さんがドアから入ってきてきて祭壇に辿り着くまでの間は、存分に見てられるよな？ 招待客が多くて会場が広ければ祭壇までの距離も長くなる——その間、じっくり姫さんの花嫁姿を堪能しようって寸法だらう？」

「おーさわー!!」

「怒るところを見ると、凶星だな！ なーにが体のため、だ、姫さんの鍛え上げた体が、たかだか半日の結婚式でどうにかなったりするもんか。飲み食い？ そんなもの好きにさせてやればいい。多少汚そうが何しようが、レンタルじゃあるまいし、かまいやしねえ

だろうが！」

幼稚園からの付き合いで俊紀の性格を知り尽くしている大澤は、俊紀が隠しておきたかった願望を容赦なく暴き出してしまった。

入籍してから既に一年、今さら結婚式をおこなうそもその目的は、佳乃を原島俊紀の妻として全世界に見せびらかすことにある。

そのために日本はおろか、世界各国のマスコミを呼び寄せて報道させる手筈も整えてあった。

目的が『これが原島俊紀の妻だ』と世界に顔をさらすことにあるならば、ほとんど素颜がわからなくなるような白塗りの化粧では意味がない。ウエディングドレスならばベールだって途中で取るし、佳乃の認知度は一気に上がる。万が一にも佳乃がまた事件に巻き込まれたり、逃げ出したりするようなことがあっても、世界中の人々の目が彼女を追うだろう。

……というのが、『体のため』に次ぐ俊紀の表向きの理由である。

だが、それで大澤をごまかせるなんて考えたことが大間違い。そんな理由は一刀両断にされた。

「世界に顔をさらすなんて、今さらもいいところだ！ あんたが新聞やテレビであれだけ世界中に姫さんの写真ばらまいたのを忘れたとは言わせねえ。原島財閥総裁の妻がどんな顔をしてるかなんて、もうとっくにみんな覚えちゃまっているぜ！ おまけに人前で堂々と『誓いのキス』か？ 適当なところでちゃんと切り上げられるのか、あんたは？」と大澤は少々下卑た笑いを浮かべる。

純白のウエディングドレスに身を包んだ佳乃がしずしずと歩いてくる。祭壇の前で待ちながら、その姿をずっと眺めていられるのは至福の時だろう。

和装が似合うことは佳乃の祖父の葬儀でわかっていたし、可能ならば何度でも衣装替えをしてその全ての姿を見たいと思う。だが、どれか一つと言われれば、俊紀はやはり教会とウエディングドレスの組み合わせを選びたかった。思い切り深い誓いの口づけをして、純白のドレスに包まれ、紅白幕かと思うほど全身を真っ赤に染める佳乃が見たかった。

「かわいいそうになあ、ガキの頃から決めてたって言ったのになあ」

大澤は、あー俺なら白無垢でもなんでも着せてやるのにー、どうしてもって言うなら白無垢で教会式だってありだぜー、と、相変わらず嫌みたっぷり言う。

そんな結婚式などあるはずがない。それなのに俊紀は、つい白無垢でバージンロード

を歩く佳乃と、それを祭壇で待ち受ける紋付き袴姿の大澤を思い浮かべてしまう。そして次の瞬間、やにさがっている大澤に頭の中で思いつき蹴りを入れた。

だが、そんな架空の蹴りで大澤にダメージを与えられるわけがない。大澤は涼しい顔で、「でもまあ、全部ぶちまけるとあんたの面目も丸つぶれだから姫さんには黙っというやるよ」

なんて、最後の最後で寛容なふりをする。俊紀の頭の中で、大澤にもう一発蹴りが入れられた。

ともあれ、本人の希望から離れているとはいえ、佳乃の体調を考えれば洋装が妥当だということは大澤も認め、俊紀の決定を覆すことはなかった。

十

「和子様……今日も来てくださいませんでしたね……」

門前との打ち合わせを終え、夕食の席に着いた佳乃がぼつりと呟いた。

俊紀の入院中ずっと社長代行を務めていた孝史はようやく全ての引き継ぎを終え、事故が起こる以前と同じ隠居状態に戻った。

今日は結婚式の打ち合わせのあと、孝史へのお礼の意味を込めて原島邸で食事会を開くことになっていた。和子には、打ち合わせはともかく食事だけでも、と声をかけてあったのだが、彼女はその食事会にも、体調が優れないという理由で姿を見せてくれなかった。佳乃の帰国後、原島邸では何度も食事会やお茶会がセッティングされた。そのすべてに和子は欠席していたのだから、その理由が口実に過ぎないことは誰もがわかっていた。和子の心境は説明されるまでもない。

後ろめたくて合わせる顔もなくて、さらに詫げる言葉すらない。いくら佳乃が許すと云ったところで、はいそうですか、となるほど、普段の和子は厚顔無恥ではない。

俊紀の事故をきっかけに常軌を逸した和子は、城島塔子の指摘によりようやく自分の過ちに気づいた。一度我に返れば、俊紀の事故のときに見せた佳乃への態度を思い出して、まともに佳乃の顔を見られなくなるのは当然だった。

だが、どこかでそれを乗り越えてもらわなければ、和子はこの先、佳乃はもちろん俊紀とだって顔を合わせづらくなってしまう。

時間が全てを解決してくれると思うこともあったが、その時間はいったいどれほど必要なのか。

佳乃が帰国してから一ヶ月。来月ならばいいのか、それとも来年までかかるのか……

見えないトンネルの出口を思うと、佳乃はため息をつくことしかできない。きつと同じように途方に暮れているだろう和子と思うたびに、そのため息はさらに深くなっている。

食事の手を止め物思いにふける佳乃を見て、孝史もまたため息をついた。

孝史にしても、ただ手をこまねいていたわけではない。何度となく和子に誘いはかけたが、そのたびに言を左右に断られてしまう。

和子の高いプライドも、やってしまったことへの後悔の深さもよくわかっていて。事故が起きる前のように、本当の親子さながらに屈託なく佳乃と言葉を交わす日が、そう簡単に戻ってくると思えなかった。

今ここで、和子の意に反して佳乃と同席させ、話をする機会を作ったところで、和子が佳乃に詫びられるとは思えない。頭の中では詫びなければならぬと承知していても、実際に頭を下げるとなったら、すんなりとはいかないだろう。何せ相手は、息子の嫁、しかも息子よりも遙かに年下の佳乃なのである。長年にわたり原島邸の女主人を務め、皆に傳かされてきた和子にとっては、耐え難い状況としか言いようがなかった。孝史は、まさかとは思いなながらも、和子が佳乃に対して再びマイナス感情を抱くのでは……とい

う恐れを消せなかった。

だからこそ、佳乃が和子との関係を早く修復したいと願っていることはわかっていても、無理強いはできなかった。原島邸からの誘いに首を振り続ける和子に、そうか……じゃあまた次の機会に……としか言えずにいたのだ。

それでも和子は、結婚式自体には「もちろん、出席します」と言っている。今はその言葉どおり、彼女が式場に現れてくれるのを待つのみだった。結婚式で顔を合わせれば何かが動き出す、そうあってほしいと誰もが願っていた。

十

お父さんやお母さんが生きてくれたらなあ……

佳乃は、夜更けのベッドで眠れないまま、空に浮かぶ月をカーテンの隙間から見ている。原島邸のそれぞれの部屋に掛けられているカーテンは、どれも重く遮光性の高いもので、閉めてしまえば部屋の中は夜の底のように真っ暗になる。

そのあまりにも人工的な暗さが嫌で、佳乃はいつも少しだけ隙間を空けておく。二人が寝室をとにもするようになった当初、真っ暗な中で眠ることに慣れていた俊紀

は、わずかな灯りにも文句を言っていたが、すぐに何も言わなくなった。今も彼は、佳乃に腕を貸したまま、穏やかな寝息を立てている。

夜を費やす男女のあれこれに佳乃が照明の存在を喜ぶわけもない。それならばたとえ月や星の微かな灯りでも、ないよりはましだと思っただかもしれない。佳乃は、明るすぎるのは嫌だけれど、月明かりの中で見る俊紀の姿は気に入っていたし、俊紀もきっとそうなのだろう。

窓から部分的に見える月に、流れていく雲が薄くかかる。その速さから、窓の外、あるいは上空では相当強い風が吹いているのだとわかる。

ちよつと私の心模様みたいだ……などと思いながら、佳乃はその様を見ていた。

和子の問題は常に心にのしかかっている。和子が佳乃と話すらしてくれない現状では、待つことしかできないとわかっている。だが、わかっているとしても、その重さが減るわけではない。こんなとき、母が生きていてくれたら、愚痴の一つも零せるだろうし、何よりも和子と同じ母という立場から参考になる意見をくれたかもしれない。それなのに、母はもうとっくにあちらの世界の人。今頃は父と仲良く研究三昧さんまいでもしていることだろう。そう、父にしても……と、佳乃はまた一つ、ため息を重ねる。

あの会場、入り口から祭壇までどれぐらい距離があるのかな……お父さんがいない花嫁は、誰と一緒にバージンロードを歩くのが一般的なんだろう……。俊紀さんは……やっぱりパスだなあ……

教会式で、新郎新婦が同時に入場することもあるとは知っていた。実際に、早くに父親を亡くした佳乃の友人も、新郎と共に入場した。けれど、佳乃はそれを避けたいと思っている。

神前や仏前の場合と違って、教会のバージンロードには明確な意味があると聞いた。それは新婦の歩んできた人生を表す。だからこそ、両親、あるいは兄弟、それ以外でもとにかく新婦の人生に深く関わり、大事に育んでくれた人と歩く。

そうして祭壇の手前で待つ新郎のもとに辿り着き、祭壇までは新郎新婦が一緒に歩む。これ以後の人生をずっと一緒に歩く、その第一歩として……

そう考えると、最初から新郎新婦で入場するというのはちよつと違う……と佳乃は感じるのだ。

父も兄も祖父もいない。付き合ひのある親戚は宮原の祖母だけだが、彼女がそんな役を引き受けてくれるとは思えない。エスコート役を頼めるほど親しい男友達もいない。となると、佳乃は一人で俊紀が待つところまで歩いていくしかなかった。

教会いっばいに詰めかけた参列客やマスコミの中、会場中の注目を集めて一人で歩くのは度胸がいる。

どこかから招待客の目を引きそうなかわいい女の子でも連れてきて、フラワーガールとして先導させるという手もないではないが、そんな女の子にも心当たりがない。

数少ない佳乃側の招待客として参列予定の橘佳樹・瑞穂夫妻。その愛児、美弥は女の子と言えば女の子であるが、彼女はまだ独立歩行すらままならない。何より、きれいな花びらが満載された籠を見たら、花嫁などお構いなしでそこらに撒き散らかすか、美味い何かと勘違いして口に突っ込むことだろう。想像するだけで楽しくなってしまうけれど、やっぱりそれもパスだ。

いや……さてよ、いつそ佳樹さんに……と思った瞬間、俊紀のしかめっ面が目に見えんた。

無理だよね……俊紀さん、絶対認めてくれない……

あの二人は、似たもの同士の近親憎悪としか思えない対立関係にある。そして橘夫妻が佳乃を匿ったことへの恨みを俊紀が忘れるわけがない。花婿側と花嫁側の招待人数のバランスがあまりにも悪く、少しでも佳乃側の客を増やすために、橘一家を招きたいと佳乃が言ったときですら難色を示したのだ。

せめてお父さんとお母さんが生きていれば、もう少しバランスがとれたのになあ……けれど、もしも両親があんなに早くに逝くことがなければ、佳乃はバイト三昧ぞまいの生活を送ることもなく、ハウスクリーニングのアルバイトをすることもなかった。

原島邸の清掃に臨時で入ることも、困っていた宮野を助けて夜食を作ることも、その後俊紀と会うこともなかった。そう考えれば、両親を恨むというのはなんだか罰当たりな気もする。

だったらもういいや……独立独歩は谷本家の家訓だし、祭壇までひとりて歩くぐらいなんてことない。右足と左足を交互に出しさえすれば、ちゃんと辿り着くはずだ！

そして佳乃は、衆人環視の中、バージンロードを一人で歩く覚悟を固めた。

十

結婚式当日、佳乃は例によって門前の着せ替え人形状態で、早朝からメイクだのヘアセットだの大騒ぎだった。和装ならヘアセットなんていらなかったのに……という佳乃の泣き言を聞き流し、門前は佳乃を親睦会など比べものにならないほど見事に飾り立てた。

「やつと支度が終わって、佳乃が控え室でやれやれと一息入れているところに、親友の田宮朋香たみやともかが顔を出した。

「うわー、化けたねえ佳乃！」

フル装備の佳乃の姿に、朋香はとても褒め言葉には聞こえない声を上げる。

聞くところによると、俺様総裁はここぞとばかりに佳乃を飾り立てたがり、ウエディングドレスにもダイヤや水晶といった宝石を使うことを提案したそうだが、そんなことをすれば、例によって佳乃が「保険かけてー！」と大騒ぎすることは目に見えていた。

そのため、門前は佳乃に相談するまでもなく却下したらしい。

「宝石なんかで飾り立てなくても、俊紀様の花嫁は世界一の輝きです」

という、聞いた人間が背筋が痒かゆくなって身もだえしそうなことを言った門前に、俊紀は平然と「当たり前だ」と返したというのだから、いったいあの男はどこまで病やんでいるんだ状態。

いずれにしても、逃亡、誘拐もどき、事故、そしてまた逃亡——と、その全てを乗り越えて、さらに俊紀という世界で一番愛しい男の子どもを宿している今、輝くなど言うほうが無理ではあった。



朋香は長年の親友の晴れ姿をじっくり確認したあと、「ブーケトス、ちゃんと私を狙って投げてね！」と念を押して控え室から出ていった。

「花嫁様、そろそろお時間でございます」

佳乃の支度をサポートしてくれた式場の女性職員が声をかける。

佳乃は、控え室の椅子から立ち上がり、存分に広がった裾に気をつけながら示された方向に歩き出した。

何度となくホステス役をこなした原島邸親睦会のおかげで、ロングドレスには慣れてる佳乃だが、さすがにこのウエディングドレスの裾には苦労させられる。もともと決めていたマーメイドラインのドレスと違って、今身につけているのは、スカートの内側に子どもか一人や二人隠してしまえるほどのプリンセスライン。

歩くだけでも四苦八苦していた佳乃は、結婚式場の中に設けられた教会に辿り着くまで、扉の前で待っている男の姿に気がつかなかった。

「佳乃様、本日はおめでとございます」

いつもどおりの穏やかな笑顔が佳乃に向けられていた。

「宮野さん……！」

「俊紀様に、本日佳乃様を祭壇までお連れする役を仰せつかりました」

式場のコーディネーターも、孝史も、そして俊紀本人も、バージンロードを一緒に歩くエスコート役の心配をした。

その役を任せられる人間が一人もいないと知った孝史などは、いっそ自分が……とまと言ってくれたが、佳乃はその頃にはもう一人で入場する覚悟を決めていた。なので、そもそもエスコート役は花婿の父親が務めるものではないし、花嫁一人で入場するというのも外国映画みたいでかっこいいじゃないですか、とその問題を片付けてしまった。

けれど、式の時刻が迫ってくるうちに、やはり不安は高まり、足が竦みそうになっていたのだ。参列者の尋常ではない数も、佳乃の緊張に拍車をかけた。その不安と緊張が頂点に達しそうなところまで、宮野の穏やかな笑顔が待っていてくれた……

「私などが畏れ多いとご辞退申し上げますが、俊紀様がどうしても、とおっしゃられまして……分不相応は重々承知しておりますが、私が務めさせていただきますようお願いいたします」

宮野が、佳乃のエスコートを頼まれたのは前日の夜、それもかなり遅い時間になってからのことだった。

明日は早いし花嫁はあれこれ大変だから、と先に佳乃を休ませたあと、俊紀は宮野を書齋に呼んだ。

「佳乃のエスコート役を頼みたい」

滅多にない深夜の呼び出しに、何事かと身構えていた宮野に、俊紀はあつさりそう言った。

「そんな畏れ多いこと……」

と、宮野はすぐに断ろうとしたが、俊紀はさらに言葉を重ねる。

「佳乃は、一人で大丈夫だと言っている。だが、あれはおそらく強がりだ。実際、あの役を務められる人間は佳乃の血縁の中にはいない。付き合ひのある男の親戚なんて一人もいないんだからな。友人の中には一人ぐらい男もいるんだろうが、それは私が嫌だ」  
佳乃の友人に男がいるかどうか確認したことはないが、佳乃の性格を考えれば女性よりも男性とのほうが気安くつきあっていたのではないかと思う。

少なくとも柔道関係の男友達は先輩後輩を含めてたくさんいるはずだ。ただ、その連中とは、佳乃が原島家と関わるようになって以降ほとんど会っていないだろう。そうなるように俊紀が計らったのだから当然である。各種コンパ、同窓会、打ち上げ……軒並みキャンセルあるいは途中退場になるようにあらゆる手を使った。

俊紀のまったくもって卑劣な努力の結果、学生時代からの友人、特に男性で今も交流があり、花嫁のエスコートを頼めるような人物は皆無だと思われた。

唯一の例外は、つい最近知り合ったあの国際弁護士ぐらゐである。橘佳樹は、佳乃たつての希望で一家揃って結婚式に参列することになっていたが、彼に佳乃の手を取らせるなんて考えただけでも腹が立つ。橘夫妻が佳乃を匿かくまったことへの怒りは今も消えていない。しかも、あの男の容貌はあまりにも整いすぎている。絢爛豪華けんらんごうかと言われるルックスを持つ俊紀ですら、これは敵わない……と思わせる悪魔的美貌。いくらあの男が妻子持ち、かつ妻を溺愛していることが明白でも、あんな男を佳乃の隣に並ばせるなんて冗談じゃない。

というよりも、本当はどんな男も佳乃の隣に並ばせたくないし、指一本触れさせたくなかった。

もてあますほどの独占欲は、出会った日から少しも薄れていない。それどころか日々

増大中である。

だが一方で、結婚式を前にして自分の不安を押し殺しているに違いない佳乃のために、なんとかエスコート役を用意してやりたいという気持ちも嘘ではない。

どうしても、誰かに佳乃を託さねばならないならば、佳乃が原島邸に現れたその日からのつきあいである宮野しか考えられなかった。

年格好もふさわしいし、宮野が佳乃に向ける感情は、ほとんど親が子どもに向けるものと同じだ。

宮野に頼もう……それが一番だ。俊紀はそう決断した。

「というわけだ。私のためでもあると思って引き受けてくれないか」

「いや……でも、それはやはり……」

宮野は俊紀の心情を聞いたあとでも返事を渋った。宮野は長年使用人頭として原島邸を仕切ってきたが、人前に出るのは苦手だった。孝史から俊紀に代替わりし、佳乃が来るまでの間は、不在がちな主の代わりに原島邸の全てに目を配ってきた。だがそれはあくまでも裏方、縁の下の力持ち的な意味合いである。主を差しおいて表に出たことなど一度もない。

しかし、結婚式で佳乃のエスコート役を務めるとなると話は違う。客が佳乃に注目すれば、当然その隣にいる自分も見られることになるのだ。どう考えても自分に向いた仕事ではなかった。

「嫌だつて言ってるじゃねえか。年寄りに無理強いはよくねえぞ」

そこにいきなり割って入ってきたのは、大澤だった。

話は全部聞いたぜ！と言わんばかりの、刑事ドラマのラストシーンさながらの登場に、俊紀も宮野もあっけにとられる。次の瞬間、我に返った俊紀が言った。

「お前、いったいどこで聞いてたんだよ！」

「この屋敷の中でやりとりは全部俺が聞いてるつてことぐらい知ってるだろうに。あ、心配しなくても、あんたと姫さんの甘ったるいあれこれは別だぞ」

そこまでの覗き根性はないし、あんなくそ甘い会話、耳が勝手にスルーするからな……と大澤は笑う。

怪しいものだと思いつながらも、事実を確認することはかえって自分の首を絞める、と判断した俊紀は、その点についてはスルーに徹した。

「私だつて、佳乃が不安に思わなければこんなことは頼まない。だが、佳乃は実際に不

安を感じている。それを口に出さず、ただ耐えている佳乃を見ていたくないんだ」  
 「まあ、それは言える。その状態で放置すると、またどこで弾けて飛び出すかわかったもんじゃな。こつちが気がついてなんとかしてやらない限り、人知れずどこまでも堪え忍ぶからな、あの姫は。まったくはた迷惑な性格だ」

「だろ？ だから……」  
 「だからって別に、宮野のじーさんじゃなくてもいいだろう？ 目立つ役どころは苦手だろうに」

大澤の台詞に、宮野は大きく頷く。なかなか力強い援軍だ、とも思っているのだろう。  
 「他に誰が？ あと頼めるとしたら、厨房の奴らぐらいなものだが……」

山本にしても松木にしても、佳乃とのつきあいは長い。だが当日は結婚式と披露宴の後、招ききれなかった者たちのために原島邸で二次会がおこなわれる予定になっていた二次会と言っても、招待客は親睦会と変わらないぐらいいの人数なので、彼らはその支度でんやわんやだ。

佳乃たつての願いで、二人とも結婚式にこそ参列はするが、頭の中は料理でいっぱい、花嫁のエスコートを引き受けられる精神的余裕などないに違いない。

そのあたりの事情もちゃんと知っている大澤は、あっさり俊紀に同意した。

「ああ、あいつらは無理だな。頭の中、カナッペやらローストビーフやらでいっぱいだろう」  
 「だから他にいないんだ」

「いや、最適な人間が残ってるぜ」

「誰だ？」

「俺」

大澤は親指で自分の胸を指さし、にやりと笑う。そのあまりにも挑戦的な眼差しに、一瞬にして俊紀の頭に血が上がった。

「却下だ!! とんでもない!!」

「なんでだよ。俺だったらボディガードも兼任できて安心安全だぜ」

「どこが安心だ! お前なんか任せたら……」

そのとき俊紀の頭の中に浮かんだのは、古い映画さながらに手に手を取って教会から走り去る佳乃と大澤の姿だった。

俊紀に嫌がらせをするのが趣味、なおかつ佳乃鬚眉のこの男にエスコートなど頼んだら、入り口の扉が開く前に、花嫁を連れてどこかに逃げてしまうのではないか……  
 はつきりと焦燥を浮かべる俊紀。宮野はそんな主の様子に不安を隠せなくなる。そ

んな二人に大澤は、我関せず、とばかりに言った。  
「ま、あなたの心配が現実化する可能性は五分五分ってとこだな」

「ふざけるな!!」

怒号とともに俊紀は、大澤に掴みかかろうとする。そんなことさせてたまるか!! と  
言わんばかりの必死の形相が痛ましいほどだった。

「絵になるだろうなあ……この俺と手をつないでドレスの裾をなびかせて走り去る姫さ  
ん」

ドレスで走りにくいかもしれないし、そもそも妊婦だから姫さんだっこに切り替えて  
やってもいいなあ……とまで言う大澤に俊紀はますます色を失う。とうとう耐えかねた  
宮野が叫んだ。

「わかりました! 私が引き受けします!!」

「おう、よろしくな!」

その返事の早さに俊紀も宮野もあつけにとられた。しばらく呆然と顔を見合わせたあ  
と、同時に笑い出す。

「やられました……」

「お前という奴は……」

最初からそのつもりで話に入ってきたのか、こいつは。

俊紀は、大澤の企みにまんまと乗せられ、彼の目論見どおりに焦ったり顔色を変えた  
りした自分の馬鹿さ加減に呆れてしまう。

大勢の招待客の前で花嫁をエスコートするなどという目立つ役どころを、大澤が自ら  
引き受けるはずがない。縁の下の力持ちという意味では、緊急対策班の班長なんて使用  
人頭以上だ。

それなのに、いかにも喜んで引き受けて、ついでに花嫁も強奪してやると言わんばか  
りの会話を展開した。

そうすることで俊紀は焦り、そんな主を見ていられないに決まっている宮野は、それ  
ぐらいなら自分が……とエスコート役を引き受けるだろう……。そんな大澤の読みは見  
事に的中した。

「姫さん泣いて喜ぶぞ。頼んだぜ、じーさん」

宮野の肩をぽんと叩いて、大澤は来たとき同様、唐突に部屋を出ていった。

「とういうわけで、私がお引き受けすることになったのです。申し訳ありません、佳乃様」  
 「とんでもない!! 私、すごく嬉しいです!!」

ありがとう、俊紀さん、大澤さん、そして……宮野さん。

自分を、あの原島邸にアルバイトに行った最初の日からずっと見守り、支えてくれた宮野。

その宮野に導かれ、これからの人生をとくに歩む俊紀のもとに向かう。

大澤はそんな佳乃の姿を、どこかの物陰から見守っていてくれるはずだ。

結婚式に出席する緊急対策班員はいない。言うまでもなく、全員が最上級の警備体制の中で、あらゆる危険に備えることになっていた。

けれどきつと誰もが、自分の役割を忠実に果たしながらも、俊紀と佳乃の幸せを祈ってくれることだろう。

俊紀と自分が今日という日を迎えられるのは、原島邸に関わるすべての人のおかげだ。佳乃は改めて感謝せずにはいられなかった。気持ちが高ぶり、こらえきれなくなつて涙が流れ出す。

最初の一粒がこぼれてしまったら、あとはもう止まらなかつた。

「あーもう、泣いちゃだめだって言ったのに!!」

門前が慌てて飛んできて、自分のハンカチで佳乃の目元を押さえてくれた。けれど、流れ始めた涙はいっこうに止まらず、とうとう門前はため息とともに諦める。

「もう、仕方がないわねえ……まあ、お化粧が崩れようがウサギ目になろうが、俊紀様はあなたが祭壇に到着しさえすればご満悦なんでしょうから、諦めることにしますか」

この涙に潤うるむ瞳を見たら、俊紀様は式なんてそっちのけで寝室になだれ込みかかないわね、と門前は苦笑する。

宮野も、そこはなんとか理性を堅持していただきたいものですね……なんて笑いながら、そつと佳乃の手を取る。

そして二人は、大きく開かれた扉を抜けて、祭壇へと続く長い通路に足を踏み出した。

十

誰もが知っている行進曲が教会の中に響き渡り、宮野に手を取られた佳乃が歩いてく

真つ白なウエディングドレスに身を包み、長い裾を引いて、一歩また一歩と自分に近づいてくる佳乃。

俊紀はその姿を見守りながら、これまでの日々を思い返す。

初めて会ったとき、佳乃は二十一歳、俊紀は三十歳だった。

一匙で俊紀を虜にしたあのリゾートを作ったのが、アルバイトの学生だと聞いたときは驚いた。

もつとちゃんと料理の修業をした人間の手によるものだとばかり思っていたのだ。いったいどんな学生だろう、と興味を覚え、無理矢理呼び出して会うことにした。

もしも佳乃に少しでも浮ついたところや、俊紀に媚びるようなところがあつたとしたら、二人の関係はまったく違ったものになっていただろう。彼女の作るリゾートは欲しいと思つたかもしれないが、彼女自身を寄せ付けることはなかつたはずだ。

ところが、あの日、原島財閥総裁である自分を前に、佳乃はあからさまに迷惑そうな顔をした。

それまでとは段違いの時給を餌に、原島邸に専属で雇い入れると言つた俊紀を、毛虫でも見るような目で見たのだ。出会つたことのない種類の視線に、俊紀はたじろいだ。

もちろん、そんなことは毛ほども匂わせなかつたけれど……

そんな目で見られたことが、かえつて俊紀の好奇心をそつたのも事実。自分に逆らうものなど許せない、という気持ちと、純然たる彼女への興味が佳乃を原島邸に引き込ませることになった。

俊紀が自分の感情にがんじがらめにされるまでは、あつという間だった。三十歳の男が二十一歳の学生に惹かれるなんてほとんど恥ではないのか、と思つたこともあつた。

だが、それもすぐに、どうでもよくなつてしまった。俊紀に反感を抱きながらも、教ええられることは素直に学び、それを高めようと努力する姿は、俊紀がずっと前に忘れてしまつた何かを思い出させてくれた。

佳乃との間で交わされる会話は、往々にして思いも寄らない方向に発展し、時にはそのとんちんかんぶりに笑い出さずにいられなかつた。規則正しい、だが静かすぎてどこかつまらなくさえ思えた原島邸での暮らしは、佳乃によって一転した。

ずっとそばにいてほしい。この存在を自分のそばに置き続けるためならなんでもする。その決意から五年、ようやく身も心も自分のものにして、これで大丈夫だと思つた矢先に起きた事故。俊紀は意識不明となり、その間に起こつたあれこれによって、佳乃は俊紀のもとから逃げ出した。

その佳乃を捜し出し、連れ戻してようやく漕ぎ着けた今日という日。教会の入り口から祭壇まで続く長い通路は、二人が結ばれるためにかかった時間の象徴だった。

彼女の感情が育つのをひたすら待って、少しずつしか進めなかった、進むことを許さなかつた日々。ゴール直前まで来ていながら、また後ずさりして逃げ出した佳乃に心を裂かれる思いだった。

逃げ出した佳乃自身も同じぐらい心を痛めていると信じていなければ、とても耐えられなかつただろう。

だがそれはもうすべて過去のこと。あんな日々はもうやってこない。これからは、いつだって佳乃は自分のそばにいるし、二度とどこへも行かない。それは、ゆっくりながらも、着実に自分に向かって近づいてくる佳乃の足取りから見取れた。

俊紀のすぐ前まで来て、宮野が足を止めた。

佳乃がほんの小さく「宮野さん、ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします」と囁く声が聞こえた。その声で、宮野の控えめな笑みが嗚咽おもうつに変わる。

彼は、佳乃の手を離れたあと、恭しく一礼し後ろに下がった。

間近に来たことで、ベールの向こうに透けて見える佳乃の瞳が、涙に濡れていること

がわかる。

溢れる涙をぬぐうこともせずに、佳乃は俊紀に手を差し出した。

その手をしっかりと握り、俊紀は佳乃を祭壇に導く。

並んだ二人を確認し、牧師の言葉が始まった。

十

結婚式と披露宴を終えたあと、夜になるのを待って原島邸で二次会が始められた。

俊紀の学生時代の友人や遠い親戚などが中心で、出入りも自由。人数こそ親睦会並みだったが、内容はかなり気楽な集まりなので、佳乃は予め、体調が優れなければ部屋に戻って休んでもいいと言われていた。

「顔色あまりよくないな。やはり疲れたんだろう。もう挨拶も済んだから、少し休んでいい」

俊紀は佳乃を気遣って、二次会の最中も何度か休むように言ったが、佳乃はそんな失礼なことできません、とその場に留まろうとした。おそらく、披露宴のときに和子と話すことができなかつたから、今度こそ……と思っっているのだろう。



和子は、かねてからの言葉どおり結婚式と披露宴には参列してくれた。俊紀と並んでいる佳乃のところへやってきて、おめでとう、と祝いの言葉もかけてくれたけれど、あとからあとから二人に祝いを述べたい客が押し寄せ、それ以上の話などできなかつた。披露宴の最中も同様で、高砂たかさごの席からほとんど動けずにいる二人に、和子が近づくことはなかつた。結局、なんとかして和子との関係を修復したいと願っている佳乃にとっては何どく不本意なまま、披露宴も終わってしまった。

だから、和子が孝史とともに原島邸に来てくれたときは本当に嬉しかったし、佳乃も明らかにほっとしたようだった。きつと、今も佳乃はなんとか話しかけようときつかけを探しているのだろう。

だが、実際に佳乃は疲れているように見える。これは困ったな……と俊紀が思っているところに佳乃の祖母、宮原静代しずよが現れた。

「おばあさま！」

佳乃が嬉しそうな声を上げる。

静代は、疲れの滲にじむ佳乃の表情と、心配そうにしている俊紀をじっと見た。佳乃の祖母だけあって、休めと言われても意地を張っている彼女の状況を察したらしい。いつもの毅然とした態度を崩さぬままに、俊紀にそつと頷いて佳乃に声をかけた。

「佳乃、私も少し疲れたので、どこかで休ませてもらえないかしら？」

「大丈夫ですか、おばあさま？」

「もうこの年ですからね。お式からずつと出ずっぱりは辛いわ」

「無理をさせてごめんさい。じゃあ宮野さんにも……」

ゆっくり休める部屋を用意してもらいます、と、佳乃は会場内のどこかにいるだろう宮野を目で捜した。そんな佳乃に、俊紀はこれ幸いと言う。

「お一人では何だから、お前も一緒に行つて差し上げろ」

俊紀にそう言われてしまえば、佳乃に反論する理由はないだろうし、彼女自身、久しぶりに会った祖母とゆっくり話もしたかったに違いない。佳乃は静代と連れだってパーテイルームから出ていった。

十

「では、何かございましたら声をおかけください」

ゲストルームに二人を案内し、宮野が下がった。

静代は、やれ疲れた……と言わんばかりに三人掛けのソファに腰を下ろすと、ぼんと

自分の隣を叩いて、佳乃にも座るように促した。

「大丈夫？ 足はむくんだりしていない？」

「大丈夫です。まだそれほど月数でもないし……」

「そう。まあでも、気をつけるに越したことはありません。お前は元から元氣だから、多少無理しても大丈夫と思っっているかもしれないけれど、普段の体ではないんですからね」

佳乃は、自分のことをよく知っている祖母ならではの言葉に素直に頷いた。

「わかってます。でも、おばあさまこそお体には十分気をつけてくださいね」

「はいはい。もう年だって言いたいんでしょう？ ちゃんとわかっているし、気もつけてますよ。私は妙子の代わりにお前が無事に子どもを産むのを見届けたいね」

「それだけじゃだめですよ。産んでからのほうが大変なんですから、あれこれ教えてください」

「それは心配ありません。こちらにはちゃんと和子様という方がいらっしやるのだから、なんでもお訊きすればいいでしょう」

静代の言葉を聞いたとたん、佳乃は微妙に顔を曇らせた。

披露宴の最後、参列客を見送る俊紀と佳乃の前を、和子は目礼のみで通り過ぎていった。

俊紀も佳乃も客たちの対応に追われ、二次会にもせひ……と伝えるのが精一杯。そのあ

とも、佳乃はなんとか声をかけようとしたけれど、そのたびに誰かに呼び止められて和子に近づくことができなかった。彼女のほうから近づいてこないところを見ると、やはり和子は、できる限り佳乃から離れていようと決めているらしい。

祖母は怪訝な顔で佳乃を見ている。

佳乃は静代に俊紀が事故に遭ったことだけは知らせたが、それ以後起こった出来事については一切伝えていなかった。仕事のことも、和子の行動のことも、静代に知らせても心配をかけるだけだと思っただからだ。

それでも静代は、和子と佳乃の間にそれまでとは違う不自然な隔たりを感じ取ったらしく、問い質すような目を佳乃に向けてくる。

やむなく佳乃は、これまでの経緯について祖母に語ることにした。

「そう……。それは和子様もお辛いことね」

静代は開口一番そう言った。

誰が見ても、理不尽なのは和子のほうである。和子の言動が引き金となって、佳乃は原島邸を出ていった。二度と原島には戻らないという覚悟で、日本をあとにしたのだ。